

カルビー miino 粟島 一人娘プロジェクト

新潟県粟島浦村 × カルビー株式会社

取組概要

カルビーの豆スナック「miino」の離島の持続可能性と新たな農業モデル開発を目指すブランディング施策。新潟県の粟島で大切に育てられてきた在来種の青大豆「一人娘」の存続と人口減少、後継者不足など地域課題に取り組むサステナブルな農業モデルをデザイン。耕作放棄地を開墾し、カルビー社員、ファン、学生などみんなで来島して栽培支援を実施。「商品売る」から「物語と体験の共創」へビジネスモデルをシフトした。



プロジェクトイメージビジュアル



2023年播種作業 参加者集合写真

基本情報

代表地方公共団体等	新潟県粟島浦村
代表民間団体等	カルビー株式会社
他の連携団体等	一般社団法人 粟島観光協会 / 株式会社朝日広告社 / 特定非営利活動法人 離島経済新聞社
カテゴリ	地域振興・交流 / 農林水産業振興 / 地域情報・行政情報発信
事業費	
目指すSDGsゴール	
事業化までの期間	2020年12月から検討を始め、2023年4月に初の商品発売。現在も栽培支援事業は継続中

取組内容



2023年7月 雑草抜き・土寄せ作業



開発した商品 miino(ミーノ)一人娘

この取組で解決した課題	人口わずか325人。日本海にぼつんと浮かぶ粟島は日本で4番目に人口が少ない自治体で、高齢化率が最も高い離島のひとつ。島で長年育てられてきた在来種の青大豆『一人娘』は、他人に教えたくない程おいしいことから「いうなよ」という別名も持つほど。島外にはいっさい出荷されず、今はもう粟島と長野県の一部でしか栽培されていない豆。島の人口減少と生産者の高齢化で生産量は減り続け、このままでは種の存続が危ぶまれる状況のなか、カルビーが『一人娘』に会い、豆スナック「miino(ミーノ)」のブランディング施策として離島の持続可能性と新たな農業モデル開発に取り組んでいる。
解決に向けた手法	粟島浦村、粟島観光協会と連携しながら島北部の耕作放棄地を開墾。播種から収穫までほぼ全て手作業、無農薬の栽培に毎回カルビー社員やファンが来島し生産支援に取り組むとともに、関係人口づくり、後継者育成、PRでの情報発信など島の課題解決と活性化に取り組んでいる。また栽培指導は新潟県村上地域振興局にもアドバイスをいただきながら進行中。 「商品売る」から「物語と体験を共創する」へ、持続可能なビジネスモデルの構築を推進中。初めて島を訪れてから3年、2023年ついに初めての商品を発売。開墾地は70a以上となり、いまや島でいちばん大きな圃場に。栽培支援ツアーには自費での参加にもかかわらず毎回、北海道から九州まで全国のカルビーファンが参加。リピーターも多年間参加者はのべ100名を超える。それらの活動が高く評価され第3回新潟SDGsアワードで大賞受賞。

取組詳細

事業推進上の各団体の役割分担	カルビー株式会社：事業主体・商品開発 粟島浦村：事業協力・サポート 粟島観光協会：栽培作業・栽培支援ツアー実施 株式会社朝日広告社：企画・運営・プロデュース 特定非営利活動法人 離島経済新聞社：コーディネート
地域関係者との連携方法	粟島観光協会を中心に、島内の在来種の青大豆「一人娘」の生産者や、耕作放棄地の地権者、地域の小中学生（離島留学生）などを結びつけ、島内の多様な参加者を巻き込んで進行。栽培支援作業には毎回325人の島から30人以上の島民も参加しています。
資金調達方法	カルビーのマーケティング予算および、商品販売、ツアー参加費など
資金調達方法の補足	
事業推進上の課題・工夫	生産者の超高齢化と後継者不足という最大の課題に対して ・毎回の栽培作業にカルビー社員が何名も来島 ・栽培ツアーを開催しカルビーファンや大学生が全国から自費で来島 ・島北部の耕作放棄地を開墾して新たな栽培地を確保 2022年は40a、2023年は72aの栽培面積で、いまや島最大の圃場に ・栽培指導に新潟県村上地域振興局にも協力を仰ぐ ・地元メディアの新潟日報も毎回参加、粟島で代々受け継がれてきた在来種「一人娘」の存在とプロジェクトの取り組みをPRして、話題化、付加価値づくり。 ・プロジェクトを通じた関係人口づくり、後継者づくりに取り組む

担当者のコメント

優良事例応募項目

応募にあたっての記載事項	<p>①地方創生SDGsの視点 日本の有人離島は400島以上あり、400島あれば400通りの多様性や豊かさがある我が国の宝物です。一方で離島地域はその立地位条件ゆえに持続可能性の課題先進地であるとも言われています。 今回の粟島にだけ残る在来種「一人娘」のようなその地域固有に残る価値は全国の地域や離島にあり、「一人娘はその象徴のようなものです。種の存続だけでなく、そのことを通じた後継者作りや関係人口作り、PRなどを通じた情報発信など、立体的な取り組みとすることで地域に眠る価値を再発見するとともに様々なサステナビリティの視点で地域の持続可能性に結びつけています。</p> <p>②ステークホルダーとの連携 行政（粟島浦村、新潟県村上地域振興局）、民間（カルビー、朝日広告社、粟島観光協会）、教育（新潟大学、粟島小中学校）、メディア（新潟日報、新潟総合テレビ）そして日本全国から自費で来島するカルビーファンなど、多くのステイクホルダーを巻き込み連携しながらのプロジェクト実施</p> <p>③モデル性・波及性 このモデルをカルビーでは「粟島モデル」としてこの先他地域でも展開することを視野に入れています。持続可能性の課題先進地離島地域で生み出したこのビジネスモデルは、離島に限らず全国の様々な眠っている価値の掘り起こしや地域全体の活性化に結びつけることが可能と考えています。</p>
--------------	---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------